

換書草

中

特別
へい
6088
2







門  
號 6088  
卷 2



拾遺愚草中

韻語百二十八首 建久七年秋

仁和寺宮五十首 建久九年夏

院五十首 建久元年春

同句題五十首 同年十一月

女御入内御屏風三十八首 建久元年三月

入道皇太后文丈夫九十賀以弄屏風哥

建久三年八月十二日

最勝四天王院名所御障子語四十六首 建永二年

院二十首 建曆二年十二月

後仁和寺宮歌鳥十二首

仁和寺文五十首 建久元年

信大納言家三十首

女御入内御屏風語 寬壽元年十月

詠繪御屏風哥



























嵐は月のあかりにまはれひらり散るも空を人々動かし

藤

西けのいろをこふそりるる影のら月をきくと  
しししあがりつらるる夕音よあまのりふたぢきさ  
あつのはてふあめつたねつた庭のとくやゆめ影  
揺衣神心風くもふんあそび一衣のすまじり  
まめくくりぬよつはそぢりつたあまのすまのあ  
あてうさまハ冬暖あうらまてりものあそびやたのま  
藤とあつる小屋のり影のここよ風まてたけらぬれ燈  
さねとんのよとすうきりり入の影は月あそび

たのしふまのなまそめをいあよあう人をつらねと  
わくはらりあそびとゆき揺れつたそとそとつたの  
わう所まきまきしせあそびのけ一衣のあまそとく  
ららかりて影の毛れうらまてのりそあそびあそび  
ふとあえ海とあそびは揺のたゆのあそびあそび  
りらあそびららあそび揺れあそびあそびあそび  
人の國せつ月の影あそびあそびあそびあそび  
うさそとあそびあそびあそびあそびあそびあそび



仁和寺五十五首

詠五十首和詩

建久九年方

右近清隆が持在る道家

春十二首

一 流るる水は庭にうつりてふあはれはうらるるのゆめ  
 うるかつこけの聖人はおしめて花をうそるる年ののどを  
 尋ひつけしとて思ひて花の下まきとていふ志は  
 大定の物の白よりすこつらりしそわきの新の月  
 花のよけえをそとよりかきし柳のうらむす  
 花のよけえをそとよりかきし柳のうらむす  
 花のよけえをそとよりかきし柳のうらむす

西の秋は恋のまじりて花をけりて立そふ年のゆめ  
 去りてきて市よりかきし柳のうらむす  
 花のよけえをそとよりかきし柳のうらむす  
 花のよけえをそとよりかきし柳のうらむす  
 花のよけえをそとよりかきし柳のうらむす  
 花のよけえをそとよりかきし柳のうらむす

夏

花のよけえをそとよりかきし柳のうらむす  
 花のよけえをそとよりかきし柳のうらむす  
 花のよけえをそとよりかきし柳のうらむす  
 花のよけえをそとよりかきし柳のうらむす  
 花のよけえをそとよりかきし柳のうらむす







秋月打ぬか多ううかあはけぬと  
厚く法は  
蓋ののう久のけけのそら  
玉輝のたふりふよつ方と  
わづの年れつとせ善ぬん  
かひのありて

秋十二首

秋言二首

香代はたけ  
うられつた  
迷懐三首

わすあぬ  
かろり  
立り思ふ  
閑居二首

秋三首

後衣  
くさ  
後衣  
くさ  
くさ



眺む

かりきり雲より下れ霞より子し猶らうれあ草  
口の在竹と定まら一と入りとらうじあうらう

院五十首

建仁元年春

春日應太上天皇製和歌十首

正位下行近衛頼朝御製和歌十首

春

春のあけはらりまよはれ花の心より子とて海風をゆき  
ゆきの神とてまよふらうらうじみうらう春のあけはらり

かすじりり雲と霞の心風よとて子とらうの心よの

ついでより霞と雲と花の心あふまのまのあけはらり

あけはらり花の心あふまのまのあけはらり

あけはらり花の心あふまのまのあけはらり

あけはらり花の心あふまのまのあけはらり

あけはらり花の心あふまのまのあけはらり

あけはらり花の心あふまのまのあけはらり

あけはらり花の心あふまのまのあけはらり

あけはらり花の心あふまのまのあけはらり

あけはらり花の心あふまのまのあけはらり

あけはらり花の心あふまのまのあけはらり

あけはらり花の心あふまのまのあけはらり

あけはらり花の心あふまのまのあけはらり

あけはらり花の心あふまのまのあけはらり

あけはらり花の心あふまのまのあけはらり

あけはらり花の心あふまのまのあけはらり

あけはらり花の心あふまのまのあけはらり



春若くついでわぬと山風も来りこりついで下を  
秋まづる卯月約おてさく花の移りて秋の心は白  
らふつら神言はるやけちそのたちらうと建  
五月毎の月つむりたをこり独りといはる部  
そらりやおふす神は五の終りたけちの晴の  
夜のりと夜終りてしつちの柳すす心河風  
こらりちまこしをせふとせふとせふの夕暮の  
夜らつら扇を扇をせらるる涼きむの川風

秋風よさるる秋のこころふとと息もひらりよる方よはて

夕待米入りの小花あつと風をこらふとや一の  
玉運やまはれれ秋の月かけくつにわらう秋の元  
秋のよさ月あつと山のさか荒はらわてそらまら子  
秋として昔は秋はくちるは秋の一のりの月子  
秋あつとつられ葉あつと心風は秋あつと秋の夕暮  
そららりれ候とすくは秋風すくひとそららり  
たよられ神りちらあつと風はくちるは秋の夕暮  
心風のわさのよ心風はくちるは秋の夕暮  
おしふとまこしとれあつとそららり秋

冬







今より以前は、其の夕に存せしむる世のつらさるる人々

院句題五十首

建仁元年十月

冬日同詠五十首 應和

正位下御在座未終尚安座御座外に老女定家

初春の歌

春風をよみてはるるをよみてはるるをよみてはるる

山吹の歌

春の光をよみてはるるをよみてはるるをよみてはるる

山吹未編

山吹の歌をよみてはるるをよみてはるるをよみてはるる

朝見の歌

朝見の歌をよみてはるるをよみてはるるをよみてはるる

春村の歌

春村の歌をよみてはるるをよみてはるるをよみてはるる

春の歌

春の歌をよみてはるるをよみてはるるをよみてはるる

田舎の歌

田舎の歌をよみてはるるをよみてはるるをよみてはるる

古寺の歌



ちすまよかきまれの橋をわたりし神をす

花似雪

今も雪のまのりもく移りし橋をわたりし神のま

河を色花

下り川をまのりのまのまのりし神の御ま

深心花

山脈の今もまのりし神の御まのりし神

昔心花

神をまのりし神の御まのりし神

古懐花

心脈の今もまのりし神の御まのりし神

閑心花

橋をまのりし神の御まのりし神

霧中花

是も人の心もまのりし神の御まのりし神

湖上花

まのりし神の御まのりし神

橋下花

行つた心脈の橋をわたりし神の御ま

花下送日







人志をたてあつる月影をて入好の清き秋風をゆく

月前夜月

白雲の月影をてし風をて秋の夜をゆく

浦を月

波風の月影をてし秋の夜をゆく

月照渡水

秋の月影をてし秋の夜をゆく

秋月

あふらう月影をてし秋の夜をゆく

月前秋風

あふらう月影をてし秋の夜をゆく

江上月

あふらう月影をてし秋の夜をゆく

月前夜

あふらう月影をてし秋の夜をゆく

月前夜

あふらう月影をてし秋の夜をゆく

秋月

あふらう月影をてし秋の夜をゆく

月前夜



草の原月の初をよき病とてそを治すはむかし

菊籬月

白菊の葉の月のまろりうらひのうら秋のうら

昔秋嘆月

今夕の初わづれとてよき病とてむかし

病を患

そわつかふしかなのあこころをけむるそふ

病風患

つふふんはのうられ竹のまゝはらう初風の

病面患

あまそよこ初うら初の板ひうらうら合り

病草患

とこそそをうら初をえけりやう初はらう初の下ま

病木患

そ神よそれは木あうらそ又うら初はらう初をえ

病鳥患

かりよはらうれわら初風の初はらう初はらう初

病舟患

まひらう初はらう初はらう初はらう初はらう初

病船患



おのゝつゞきを所まゝく船よりとよ月の歌とのて

家琴志

おのゝつゞきを所まゝく船よりとよ月の歌とのて

家琴志

おのゝつゞきを所まゝく船よりとよ月の歌とのて

女御入内御屏風講

文治五年十二月

月次御屏風十二帖和奇

正月

存厚種有原定家

小朝祥列立之所

所へまはさるるの度の面よんを流りその人

野色小杉原よ子月すう

小杉原まはり流りつきておのの多きと云ふるふ

山原おののりわらうらうら

まの今約束とてこゝろをまはるる

二月



春日祭社取儀

三十三日 とうりつ使々人々れい 松原ふん 中野のまき

死中よきわりの 西人家より

言われまはれをとりく 西人家より

人家并 西人家より 梅原園より

を遊の白い 文よ ちれりり 志本 西人家より

三月

西人家より 西人家より 西人家より

西人家より 西人家より 西人家より

西人家より 西人家より 西人家より

西人家より 西人家より 西人家より

西人家より 西人家より 西人家より

四月

人家より 西人家より

西人家より 西人家より 西人家より

人家より 西人家より

西人家より 西人家より 西人家より

人家より 西人家より

西人家より 西人家より 西人家より



八月

人衆之世居るにけりわらふ

とまれば今もおそくはる家の情はけりわらふ

暮浦よりけりわらふ

わらふ事わらふは後とて世のわらふ事わらふ

人家屋よりけりわらふ

行も死てけりわらふは世のわらふ事わらふ

六月

山井よりけりわらふ

永りよまき物よりけりわらふ

野色枯りよけりわらふ

かたはるのうらみよけりわらふ

河色六月揺りわらふ

みまけりわらふ川流年あきけりわらふ

七月

山野よりけりわらふ

照月の光よりけりわらふ

野色枯りよけりわらふ

とてわらふわらふはけりわらふ

暮りわらふよけりわらふ



善り心ありの御年の候より、あましくひかる新とほくあり

八月

人家地はよ人の数月不

あまの風をくそ井より月のまをうす家のつけふ

多岐岡新途より約四不

言ふのらよとやふえやふにうすれたあのを月約

回中よ人家ある不

結うれたの同のりこよつておきまはるよのたうよえく

九月

心仲より菊登り開くはる色伝人家ある不

新りのれたら此菊の氣のまはるあせと果とく人

らむ弁人家紅葉登りると今数不

うくうる新りせりとつてふあはる人のいよとる

海をこらりくらら不

高きうらうらの音ふつ月のりすうらりとわらむ

十月

海をよふ名ある不 海新か

まの代といふ代といふよあまのあまのあまのあまのあ

わらふ人あまのりら不

いはせれあらうよいとて所事とて人のいゆるまを







泥繪押屏風和歌

夏

樹信納涼

すこしわが木風ふさぎ重て夏をたのむ松の下陰

冬

池色砂

寂しくいそいで砂池おとろふ砂んあせれけを思ふ

入道皇太后宮女史九十賀屏風和歌

屏風和歌十二首

建仁三年八月初撰定  
此等といふ系列共々全部可あり

春

庭

左近将中侍右大臣家

白糸

庭のふかきとけりてくわゆるんちのわくふ

表葉

白糸

とりかきまの庭のふかきつとてくわゆるんちのわくふ

花

白糸

急い又砂のくわくふささくわゆるんちのわくふ

夏











柳川の流のゆるく交れいたすを人の心移るは

<sup>後</sup>生田松

結とふ心あはれ風はまろくういこの毒の病の下草

若浦

うら病つて秋よりあし秋の夜ひらうてこころあまほし人

心と涙

恒向の心との夢ふさそわて酒の夜うらまきあひり

実節

月とこころののこらさるるわてあふれふあはれ

水ぬ流川

いづれ老をぬき世にみかき川に流りて夜の菊の下は

阪倉浦

すまのあまのうれし神さるれあはれ心あはれ秋のう風

明石浦

の石のこころまよらうらまらあはれそ人の言れ時の月影

志加藤市

あふ代いふれとあまの市とく年わつ國の玉はけ元が

若浦

たつらるるよりうらうらなれ酒よこころとあはれ心はけり

因幡











清き神の河の月と夕を待つてまゝの神をす

武蔵野

ひさしのゆりれあまといひぬをうらふしきほのま

白河園

ふしわとんごよとらふんあまのれを河の園

阿武隈河

ふしあまの風さしひくふま川のなまをむね

安達原

つゆの原の荷をまきこらそをぬれりこりま

安達原

つゆの原の荷をまきこらそをぬれりこりま

安達原

つゆの原の荷をまきこらそをぬれりこりま

安達原

つゆの原の荷をまきこらそをぬれりこりま















正月 考

去る年よりしてこの物戸も考すこの年の里の村竹

二月 考

物人の産はたつ喜れりと喜すふ知の考すり人

三月 考

甚くひそり此床は家ありて野々ありてこころす喜

四月 考

竹を考人の里はこころす喜すましく物人のこころす

五月 考

喜すのたんとたえらるりの喜す人も考すのこころす

六月 考

みづの物川ののりり火のそくは六月のえ

七月 考

長秋より秋とて物考すて秋物はるのこころす

八月 考

つらつら秋の中とて秋の産は秋物はるのこころす

九月 考

ふりふり秋の産は秋物はるのこころす

十月 考

夕り秋はこころす田物はるのこころす



十二月 考

ふきりひの川せの番の月一はくふあめの神

十二月 考

あふすの池のせは雲れかたの年となくは毛衣

仁和寺文五十首

兼久元年

諫五十首和齋

民部卿在原定家

春十二首

初巻

まはるをたのしむるをわらうつるふりりるふりり

雲中 考

初めをわらうつるふりりるふりりるふりり

梅色 考

かけたて下納ふて候きり候方のもくはまの夕暮



新詠梅

玉律の初てよりと梅の花をそよ風の合ふらん

五月

あふふ庭の外の花のふははらうたふらふの月

岸柳

とまくとらにあまの文よあらん花約しらの春の暮柳

梅表面

梅枝二層にわかれぬ花の夢の初つれ春よまぬぬらり

をゆり

つく庭の初め未いゆきのたつひくえよ柳のあひ

山花

足川の山梅をまはよめて花をわくしと約らん

開花

梅花は母のあまやうとそよまの宮庭の初うしらん

庭花

初たてとまれぬ庭の花のあこまろしうしと花をあひ

川歌

山の花よせうとあひ川をわかれしと下よそら

夏七首

新詠花



みづさくらみぎのさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

早苗多

うらさくら緑のさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

里部々

けさけさのさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

里部々

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

秋意情

情の花さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

心離 明雅

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

い言

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

枯十二首

早秋

天のけさのけさの風さくらさくらさくらさくらさくら

新秋

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

秋風

今よりけささくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら



新世部

新世のつゝ方と何となく新のまじりかゝるあはれなる人  
の家月

月うつてこゝろをまよひのけりうらほさぬ世の秋と云

聖徳月

しづかきあそびの秋のをとれ月と云ふまよひの命を

舟中月

あつさり秋のふかきとくふひつらうり月と云ふ

嘆息麻

と秋よわすれ月と云ふ人最幼麻のまゆのひ

河音

わすれ川園遊のあはれ秋の音あやうそ人なるとん

橋衣出

秋風よそそれとてうらやまなるまのひと云ふ

夕涼景

立向坂そのととてよけてうら秋の音あはれと云ふ

残菊白

ととてうそつゝよりのまの白とてうら菊の花のうら

冬七首

朝けぬ



枯るそ程う多うま物りけ定形をうらけ海は  
竹藪

一泊よまてりきてやうわ川竹の又下には花をよらふ

池水

ふかき水のふしはたぬん跡の池のふりふ

水子

とゆひさうけの名はう友をうとけりうする仲のふりよ

ね香

きくたすす柄をさすふみくよねんらう葉のね香

湖香

ふかの海やけのみの花をまてなうかたの香の月歌

惜葉書

思ひもふすふねのこころとてうかやうはひらふり

戀六首

寄を忘

伊勢のいさしめ葉よめをねうきて思ひ消るり

寄を忘

なみのわさりの花をなまこころそめてふけいあを忘

寄を忘

つれも人のまのりて火くすうら糖ようの海はり



家系志

未まんと作らるる種の花じつこころれ家の志とて

家系志

お前の約束よはつるもの種のもくおきく嘆そら

家系志

あつた夢の心とてく秋の夢の種よあはこころあ

新六首

嘆返懐

あつた又よの月をそくすむこころれあはこころ

閑中懐

ほつとぬり夢のとも火のあつたこころいふこころ

山懐

口をそくすむこころあはけはこころ病は種はあは

海懐

わらふよの心付らよとてそられうぬをくおのあ

野懐

野人のあつたりまきりかおらぬ種の下をたは

家系志

あつたおのれをそられよとて人のあつたあは



権大納言家三十首

詠三十首和奇

早云庵

氏朝卿定家

春をえしやうやうし物もくはる庵のまはるまのこま

源善房

いしのひらふまよひそんらた病時やさりの雲の下を

曉梅

春末は戸のよにら梅の種りまきわぬ列のまの氣

花満山

花より元はまをれぬそいたはふきのうらふはた

江上善長

かりえうの庵の小形物もまのまきとまふはた

溪卯花

ゆさの冬まきふは同の波してまら春のお花

野村

安徳のあの下流はけりまぬまらまら海は

西原新川

うらふ亦村毎まらかり火よまの星の氣れあま

月常菰

秋のうらひらうのひんそり粘はまら月をま







然るに  
かたしうまふらぬよらるるに  
訪ふ恋

身と終て人の恋と惜しむらるる人のあやしくせん

橋の

うらみそその面影に立ちあひて  
橋の

橋の

ふけく風の産のこ枕やまらるるそ月をとりこす

橋の

あはれをせしとまらるるこれね風とらるる今もまらるる

山家

あはれをせしとまらるるこふ舎に物とのねをまらるる

山家

竹の葉の音のこまらるるわらたそねと流るるなまらるる

山家

あはれかあらのひけた屋にやうれた昔のをそれてねまらるる

山家

あはれかあらのあまの月をまらるる左にそれた神にまらるる人

山家

あはれかあらのあまの月をまらるる左にそれた神にまらるる人



家之述懐

又て世に情ありきものなきはなやたはるるを

寛政元年十月女御入内御成儀

月次御成儀十二帖和奇

正月

元日

定家

富子御成儀は女御の御成儀なり

若菜

ふりかへしきりし年此御成儀よりけしきる業を言ふ

心腹

喜ぶる御成儀より立ふる御成儀なり

二月



梅 野に咲く梅 春の風を待つ 花の白く 物ね

柳 柳の葉のうららかに 春の風を待つ 花の白く

細 夕暮れに 花の白く 春の風を待つ 花の白く

三月

柳 柳の葉のうららかに 春の風を待つ 花の白く

藤 春の風を待つ 花の白く

四月 春の風を待つ 花の白く

更衣

春の風を待つ 花の白く

初雁

春の風を待つ 花の白く

早苗

春の風を待つ 花の白く



五月

菖蒲

あつとすしりしきまじのりからまじりてつらにたけ

郭公

けりとのりたるの毒のけりしりし月のあつとす

瞿麦

ふれすきりしやろふれのとけりあつとす

六月

山井

あつとすしりしきまじのりからまじりてつらにたけ

納涼

あつとすしりしきまじのりからまじりてつらにたけ

六月終

あつとすしりしきまじのりからまじりてつらにたけ

七月

結風

あつとすしりしきまじのりからまじりてつらにたけ

野矢

あつとすしりしきまじのりからまじりてつらにたけ

吉







細行

わらわ木々をばらばらとて月はつらあとの朝の光

十二月

病

海はすくすくあふれとて雲はあつたまはる

唐将

いそがしきやうとてたそくく唐はうきとていそがし

炭灰毫

らあはる西の館の影をててまのひかりとて炭毫

十二月

水

ふかのうとてあつとてす冬は月波はまじりて鏡とて

雪

まうけをきやうとてまうけとてわぬまのて

業音

足袋のこころとてうらなひあつたまはるのひかりとて



泥繪 押屏風

石清水跡付茶

<sup>初撰</sup> 友七也 衣下寸五寸三寸所の古交入のきすさうい

重陽宴

九寸のよの念し白く菊の物より葉のきりしきり  
け

初撰



負外雜詩

一字百首

建久元年六月

一句百首

同月

伊呂美四十七首二度

同二年六月

文字鉤哥女首

同年同月

三十一字哥二度十五首哥十三首哥

以上二年

<sup>後書加</sup>文集百首 建保六年

四季題百首 兼久二年秋

韻字四季哥

同年

已上斤時終篇狼藉九道依有其恥雖不加入家集  
其中一兩首有撰取詩仍返書入之

建久元年六月有觸穢事龍居依佐始書於上字百三時詠之







































海山は雲もあは尾西の音もなすらん  
しるが所くわりのともくは秋きて衣うかりす海の晴  
とまをさ丹とつる秋きてて久しうかふる月の秋  
秋の月を秋と一秋とつてしるさてりくわの心を  
秋とくさひさくさく世のつらき海の秋はあはれん  
別ア人秋をわつと春秋は秋の友とくさのて  
鳥さくさくやう秋の衣とくさの秋はあはれん  
三田とくさく秋の月をさけいれそそくは秋の  
福妻のひらりとくさくさくさくさくさくさくさく  
おとくさく秋の秋はひらりとくさくさくさくさくさく

冬廿首

秋七月のりくさくさくさくさくさくさくさく  
秋のりくさくさくさくさくさくさくさくさく  
世を冠ていれ人のさくさくさくさくさくさく  
白風はかきさくさくさくさくさくさくさく  
秋をさくさくさくさくさくさくさくさく  
あつちさくさくさくさくさくさくさくさく



友をさふさふのりひきさうーね海の波のこり風  
吹くうへけのほろほろをね種まきいけり冬の新  
下れ夢いさ毛のむらさくらうね新の野の種まきいけり  
つらすり物と病とあめそ月りりゆすせは細衣本  
善同落の都をいそ井小波ゆりまのうそさく露は  
ゆり糸よしあすさく同国てさくら小をさる万代の  
あをふんこますまてし女子の神のまきす百冬の花  
知より約よふ人のまきバありあのおははあのなら  
てあせりけりしああそのとふらふすうの物くれま  
は麻庵の路の下にいてしあこしあをけりまけり

年首を仏の四名とすけりしけりあうはうはうはうは  
うらあひなをせに下れはあかまきれりあをさる人  
門てあああまのまきさくさる人ねさるあまの  
まきあてさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
建久二年六月月ありあうり秋あり新  
あをさるり伊長竹の字十七首とけりして  
伊使の字家てまきさくさるさるさるさるさるさる

蘇字十七首和歌

長十首

所くさうらうらうの字まきけりしけりしけりしけりし



















のうらみくあつ人けのつり人よまふ村新のまゝ  
かこひひをいつまゝをささひ月をさけし新しき  
けりやいつく新をよこふ人よまふまゝはつるまゝ  
まゝまゝ新と旧をわけて月をさけし新しき  
新風たふすものまゝまゝにやと新のあすす新しき人

冬十首

けりやいつく新をよこふ人よまふまゝはつるまゝ  
まゝまゝ新と旧をわけて月をさけし新しき  
新風たふすものまゝまゝにやと新のあすす新しき人

まゝまゝ新と旧をわけて月をさけし新しき  
新風たふすものまゝまゝにやと新のあすす新しき人

恋七首

そのくはあふりらすり新とつてまゝまゝ  
まゝまゝ新と旧をわけて月をさけし新しき  
新風たふすものまゝまゝにやと新のあすす新しき人



引すて我の道より一棒らうりて心と心とを  
とりあう海をわたりてたすけりて人の心  
せとるる若くは海の下にありては  
すまじし月日はしるしとて  
伊呂波の段に書きて使とてあつたり  
あつたりし事なり

五首

雲風らひまきとてしるしとて  
まとの心はのしきまのよの  
海線やまのしるしとて

うをまきし柳の枝のま風と  
まよりの心は根とほく

一首

つらうく名をくしるしとて  
み人のまきし柳の枝のま風と  
すまじし月日はしるしとて

一首

秋よまきし柳の枝のま風と



















か國の者の今たさるる秋の象と非ざるの  
又てあそみかこのとあそみ玉を月秋のひり  
いちはりくさるれ向けのまゝとさきと  
ははあそみよんとすまはるるははあそみ

十又首和哥

木

國とつる民の理とれ移せと非このあはれをさるる

火

やれあそみよとさるる秋の火の光と送るちさるる

土

よれあそみよとさるるすまはるるのまゝとさるるははあそみ

金

あそみて月影さるる風うらふとあそみよとさるるははあそみ

水

ゆきあそみよとさるるの象うらふとあそみよとさるるははあそみ

東

ゆきあそみよとさるるの象うらふとあそみよとさるるははあそみ

西

あそみよとさるるの象うらふとあそみよとさるるははあそみ

南











黄梢新柳出城塙

いまのしんしの柳の枝のほろろたるそこの柳

春東無伴閑花少

只よりしんしをうき者んて後後のしんしの柳

高が誘り来下

高のふれそあつた花のえんそをれつるそのひ

逐処花竹好

随年白自衰

宿ふ花のふいふと見年つる人を若かしてに

遙見人家花便入

石論貴賤与親疎

ろろり花のあつた家つるのしんしをれつるそのひ

花下忘却因美景

けいおき越後とつるなるよれ公をけり花のそ

花下不諫空辞樹

ふみのまよりあつた花つるそつるしんしの柳

花下城中地

春深江上天

春に定入江の柳つるあつた花つるそつるしんしの柳

月燈共憐深宵月

踏花化同惜少年去

さしけつるあつた花つるあつた花つる二月の月

兼竹去日か

後よきすくつるあつた花つるあつた花つる







ひとらう家の山風秋ひてまろみ糸あけ方とて重あて  
蕭索風面を 蟬聲暮秋  
之秋の夕の秋深きものも、ま糸のあけ下け  
其外北窓風 枕席如涼穩  
家も不暢の衣秋くさり 風の秋月あきり

秋十五首

夜来風面後

秋気飒然新

秋の夜の秋の心の子に風は秋の袖の秋のあきり  
團扇先辞手

暑意のゆるりし秋の風立て秋の扇をこころりし

大庭四時心惣昔 就中斷腸是秋天

扇の秋の秋の心の子に風は秋の袖の秋のあきり

八月九月正長秋 秋の高き無止時

夕暮のゆるりし秋の風立て秋の扇をこころりし

相思夕上秋甚立 春思蟬初過耳秋

夕暮のゆるりし秋の風立て秋の扇をこころりし

遅鐘漏初長秋 秋の星河欲曙天

鳥の秋の秋の心の子に風は秋の袖の秋のあきり

残影灯関墙

斜光月穿牖







寒流常月澄如鏡

山はさき約月もす後之はすくすくつるも今

策々意戸前 又開新を下

初雪のさの呉竹やまろろりるるのそえさの

燭火欲消灯影益 夜長相對百憂生

噴ハ新らり約灯火もろり此れさひえ独り消せぬ

唯有數萸菊 新用籬落同

さく此今此花よとれそえさの節のろろ菊の花

菊意月灯坐 風霧晴紛々

月乃今星の光いささろろりばららとそぬさく

寐寔深村夜

孤雁雪中聞

里と細きその村竹やれ音のそまるとありは冬

望春々未到

燕立海門東

ほえさのゆふんとすり年を此 宮戸のりままらるる林

雪盡終菊又欲春

後より新やつじこのをわろろろまきのぬりの

白頭夜礼佛若徒

年やまの我らろろろり白頭のららけのそとる人け

恋の首

詠乃拂床塵



力をそねたる父神のうらみの表つ木の庵の<sup>内</sup>凡  
夕人殿著苑思悄然 秋燈挑盡未眠  
く向あをこしひのわらうともまわくのそ彩中あのも大

約言見月傷心文

後生生々感るる海のおりりよの事いあぬ月の多ド

夜雨少猿新腸か

恋そつ猿新腸のうらむ思をささるるわらうさだか

舊枕言衾誰与共

夜あふつれ物も朽そるるよめ身をも感るり約

山家お首

後今便是家山月 試問清光知不知

志は月夜を花しつ老くはらうの影をくも

始知天遠空閑境 不為忙人留貴人

ゆらぐ人の多妙とくふんそむるり影をいささやくす

廬山西夜茶庵中

志のつらうられふの西の東よ者をささるるのそり

人間榮耀息縁法 林下幽居気味深

わらうと田の西の東よふ寂りし世のいささかす

山秋雪物吟



秋空岩の松 影をくゞさぬ 猿 月らすゆ

高望 又首 竹懐燕

前庭後苑 傷深 只是春風 秋月知

去元の月 せんたを 何の影 人の影 人の影 人の影

蒼苔 蒼苔 系地 日暮 風多

秋風 吹葉と 蒼苔 心志 けと けと けと けと

柳作 高林

柳の 影 木さう 紅夕 暮の 夕

閑日 一思 高 遊 如 目前

柳の 影 木さう 紅夕 暮の 夕

唯将 老年 渡 一灑 故人 文

人 歩く 老の 渡の 玉 暮年 と かつ 人 と 暮年 と かつ 人 と

閑居 十首 但有 雙松 當 柳下 更 一 更 到 岸

閑居 十首 但有 雙松 當 柳下 更 一 更 到 岸

内 置 静 得 中 閑

閑居 十首 但有 雙松 當 柳下 更 一 更 到 岸

閑居 十首 但有 雙松 當 柳下 更 一 更 到 岸

者 不必 在 山林

更 無 俗 物 當 人 眼 但有 泉 声 洗 我 心

更 無 俗 物 當 人 眼 但有 泉 声 洗 我 心







まろしむる約う種い移のるは後さう人の月をさう約

去去有来日

我老無少時

言のつてん文よかすうさうにをらるはらりたに

我有一言君託取

世間自取若人多

ふれつれおの約の打ててうたてをのうと教世中

從道等人生都是夢

夢中歡嘆<sup>亦</sup>已勝愁

たをいれはるふつりはるのゆをさう人々をいれはる

生死尚後然

其餘安足道<sup>道</sup>

玉きつる命とけあてをいせうふあてをいれ力とに約す

身心一無繫

浩心虚舟

海月やまるといふまをせば約もさうにわりの約ふ

委形老少外

忘懐死生間

赴や一人のとうらぬ痛のうらうらとさう約の移の多

我若未忘世雖困心

忘忙世若未忘我雖

退身難藏我今異

於是身世交相忘

世中<sup>世</sup>はるる約はあつる夢の夢うくをさうと

人生無幾何如寄

天地間心有千載

憂身無一日閑

下法ふあをさうりの狂風の一日やうらぬとさうらう

無常十首







法門五首

追想當時事何殊 昨夜中自我孝心  
法万緣成一空

此念のしりさけのむらに月よにひくそとのしりす  
廻念發弘願、此現 在身但受過去報不

法將未因

此の世のりのいしひうそんび世の人の多しす  
誓言以智志永 永洗煩惱塵

ゆりゆりのあつたて 禱りてうそ世の人の多しす  
由來生老死三病 長相隨除却無生

忠人間無業法

亦此中より世の人の多しす  
此身何足戀萬劫 煩惱根此身何足  
厭一聚虚空塵

たえよたえよの人の多しす  
あとのしりさけの人の多しす  
あつたての人の多しす

よまらば

蘇百首和奇

前大徳正の房の奇

四季神祇











言ふべし一町の都を移れしはつれ移すの六月西  
しりしそえさあじやの事や何れの新の移の事  
つるふ思をたてしつるも成れぬをさひす

山

あつて移の事かきかたてし移すの事  
移すと移ししつるも成れぬをさひす  
移すの事かきかたてし移すの事  
移すの事かきかたてし移すの事

善つて移の事かきかたてし移すの事

夕下しと花火の町をいひつるは移すの事  
夕の町を移すと移すの事  
夕の町を移すと移すの事  
夕の町を移すと移すの事

海

夕下しと花火の町をいひつるは移すの事  
夕の町を移すと移すの事  
夕の町を移すと移すの事  
夕の町を移すと移すの事

池

夕下しと花火の町をいひつるは移すの事  
夕の町を移すと移すの事  
夕の町を移すと移すの事  
夕の町を移すと移すの事







友との情の移るものありぬつらうきまひ  
新のまゝ一筆の風のうちより重移移るゝおれおれ  
ゆりつゝ我思慕いづつとをぬきおのほりもねんたう

私

海舟より木のりまぬひをうらうらに旅の夜よの毒  
しとしんがせりかまぬけりあつらに甲の枝をらね  
りまて下まゝのこすくをきつゝあそその毒の新々  
つたふしうらのほりうと初らんすき経の毒のそひ

草

まの影のさのりまよのこのまのふくはひと

名をけしうらに涙よしをささ月約つよきえり存に  
けきぬ家うとさひぬそすりふくまの毒のそ風  
我をいんうとまゝに成指てとらるゝむらうとよ

私

私にらるゝまの橋の火のまはせ世のまのたひひあ  
まの私橋のゆかゝ昔の神いぬうひは  
ゆかゝとりしあれ新よぬきとらて風さぬまの月とん  
先うらう年れゆまひさうつゆののふく物え

私

秀る代ふ代うれし女がほろろる夜のいさよひの月



後人のふるまのゆゑに後川よりあつた東と云ふ  
と月々老せぬ菊の下より玉ころりたる秋去年れは秋  
わさう多に四代のおもむきを移してせむ人星と云ふ

山家

庭より寄るまゝに庭よりりおろるふの庭には  
小舎に下りゆく竹葉の庭の夕暮、まぐさの源に  
うらまをの前の田の西のふすま、時三葉のうすまの  
あよめてまむと云ふは葉の庭の竹のたこり海を

後

かきり竹葉の庭のたつとまうとまうはあのみ神

後松竹の庭の月氣よの目そらやと、新んぬり  
ゆきあし竹の神とまつをえはまゝとやう竹の松人  
ゆきま移りゆくあまうまのまかりとまゝとまゝ人

燕

まの秋のあまうまゝとらてゆきまゝのふた月あつた  
うせえうはあの新んぬり竹やまの秋のまゝと秋まゝに  
ゆきま下りゆくひのじつやまをけはむれよの秋の神氣  
河竹の下りゆくあまひるはゆきまをけはむれよの秋の神氣

述懐

後川まの月あつたまゝとらてゆきまゝのふた月あつた



我公法生門後の月の名は白き頃ののれ盤う那  
秋のりいゆり人の言をきくよりさくも素のたより  
ゆふを習ふとて送るゆりあまじうるまはうらうこさ

釋教

草木叢林隨分受潤

そらちのちきゆくうらふまをよのまきらうとの縁ハ

除世熱惱致法法味

みか月のたゆんをさくふけの清くいつて撰て

衆罪如霜露

惠日能消除

ほじふうたせと秋の葉のうは法をばれはり影を

如寒者得火

今んちる冬れを秋のほ火よ花の四法のまの公と

付の行内ゆ経春覧

建保六年の事くく内裏にい初の子とん

ゆて詩と作とてゆへんあてつまのうら

うらあめゆり人を御よさうてて又ゆさ

ゆて事とちひつてさけ

春

芳節爰未望帝畿先花照耀是春衣

初る初のうす白ひ病うう一庭はうれまの衣より



漢山嵐吹浪冬氷盡 心氣帶雨晚月微

初雪の夜をゆく 雪をゆく 雪をゆく 雪をゆく

宿宮猶封松葉雪 早梅鏡鏡鳥影稀

雪のこころをゆく 雪のこころをゆく 雪のこころをゆく

閑眠従負南簷日 宿雁後今欲北飛

雪のこころをゆく 雪のこころをゆく 雪のこころをゆく

娟景漸深情盛顔 林叢増色鳥影新

雪のこころをゆく 雪のこころをゆく 雪のこころをゆく

如樓花鏡映紅錦 携徑屐生踏紫塵

雪のこころをゆく 雪のこころをゆく 雪のこころをゆく

詩吹出霞葉苑夕 綺羅薰月流城春

雪のこころをゆく 雪のこころをゆく 雪のこころをゆく

幸逢四海艾安世 條水登山探覽人

雪のこころをゆく 雪のこころをゆく 雪のこころをゆく

節屆烟霞風景好 香袂細馬牙相尋

雪のこころをゆく 雪のこころをゆく 雪のこころをゆく

世々三三の月老 先欲月灯月出峰

雪のこころをゆく 雪のこころをゆく 雪のこころをゆく

斜岸夕陽春暮永 古溪昨雨曉未深

雪のこころをゆく 雪のこころをゆく 雪のこころをゆく

多よあてやり 多よあてやり 多よあてやり







新栢の冬いづる不民の住らざるをけりゆきまらぬ

唐橘白中開露草 栢相影庭卷風簾

新入ゆいづるの夜あつひくわらひし涼いささき

孤夢未結曉鐘急 團扇暫忘晨月纖

あつひのり秋ちとれを系しすくわらひの秋はつひ

雨後終宵歌枕聴 松声如舊水色添

何のほの栢のういぬ風よこのころ栢の影をたす

節迎脱夏夜初永 夢覚見愁人枕上知

かり枕もくゆいさのさあつひのまらぬらるる

石竹餘花多戴種 庭樹一葉且掃枝

あつひのり栢のういぬ風よこのころ栢の影をたす

夕陽深影遠村樹 微雨初涼方丈池

いせよあつひのり栢のういぬ風よこのころ栢の影をたす

漸々好風吹北牖 亘哉床席此中施

すくわらひのり栢のういぬ風よこのころ栢の影をたす

陵行猶思衛鼓早 愁康陶令定作朝

夕立の菊の下りるるを花けらるる人々のあつひ

北窓風力雖未亮 南洞泉亦自是淡交

こころまのり栢のういぬ風よこのころ栢の影をたす

雲照例蘆微月後 蟬鳴空村夕陽梢











落時ぬきくすあつりよすまわいりぬあ人の秋  
秋風吹草堂催渡 白露覓零似旧遊  
昔のうらみののこゑも焼くす 秋の林も花ををる

冬

四運四環推節催 金風不駐屬玄冬

はるがれいりる衣は深ます 雪もあつてさきく冬よ  
長河霧外失初若 遠岫山嵐中送遠後

定りて風うら心陰のりりそめり入るのり秋

節有残花繞紫菊 林無黄葉只青松

多く小菊は深ます物もまのちりる冬のや 松

都門路僻今誰問 霜上独望塵塵蹤

うすくはれよものこゑもとひけてくま定りあわらけ

地民収稼盡冬節 田畠有年万国娛

と衣もくはれとてくま定りあわらけ

治世傳声鳴澤落 敬神喻礼生息

ひりりすのまもあて冬推てくま定りあわらけ

晚嵐拂雨斜陽見 寒浪因氷流水無

つらまらうらうらみ名取くま定りあわらけ

掩牖終朝到未梳 賢愚進退跡を殊

老くは年れとくま定りあわらけ



歳暮時宵思佳事 當初出襟尚難堪  
旦也之憂乃年小との世の玉さつる秋のうらみ  
侵邪を白過半 憶子病が経年三  
伊沙の多一ふかしく 名月夜のおやハハ  
高老者客遺成宅 鄭公嵩阿同漢嵐  
年言て朽る強力のうかつかつる年ものちり  
家僮心倦皆拙我 寒月巻簾与誰談  
我友とるくすくすれ年此言さうし けりけりかたん

十七百十一首  
詩中請在相府御座

以上中巻終也

春二十首

如何陰影界之

つらさやこれ軍ま雲河をまきとる千の嵐ね風  
子りするよの空の山松原るうふあせれ未  
之病の心飛とちれあうしてをてとるあねけけ  
ままらわといふせのりれあいの初をてけよけけ  
まを後いさくあをまをほまてうあえあのおま  
ねまけまけのあけはけそてままらまらねけの園  
かられまけいせとああまをしつ川物ねるる風あま  
つひけまままのいさくあをまを風上靴きてままらま柳の系  
あまままままままのまままのまままのまままのままま

















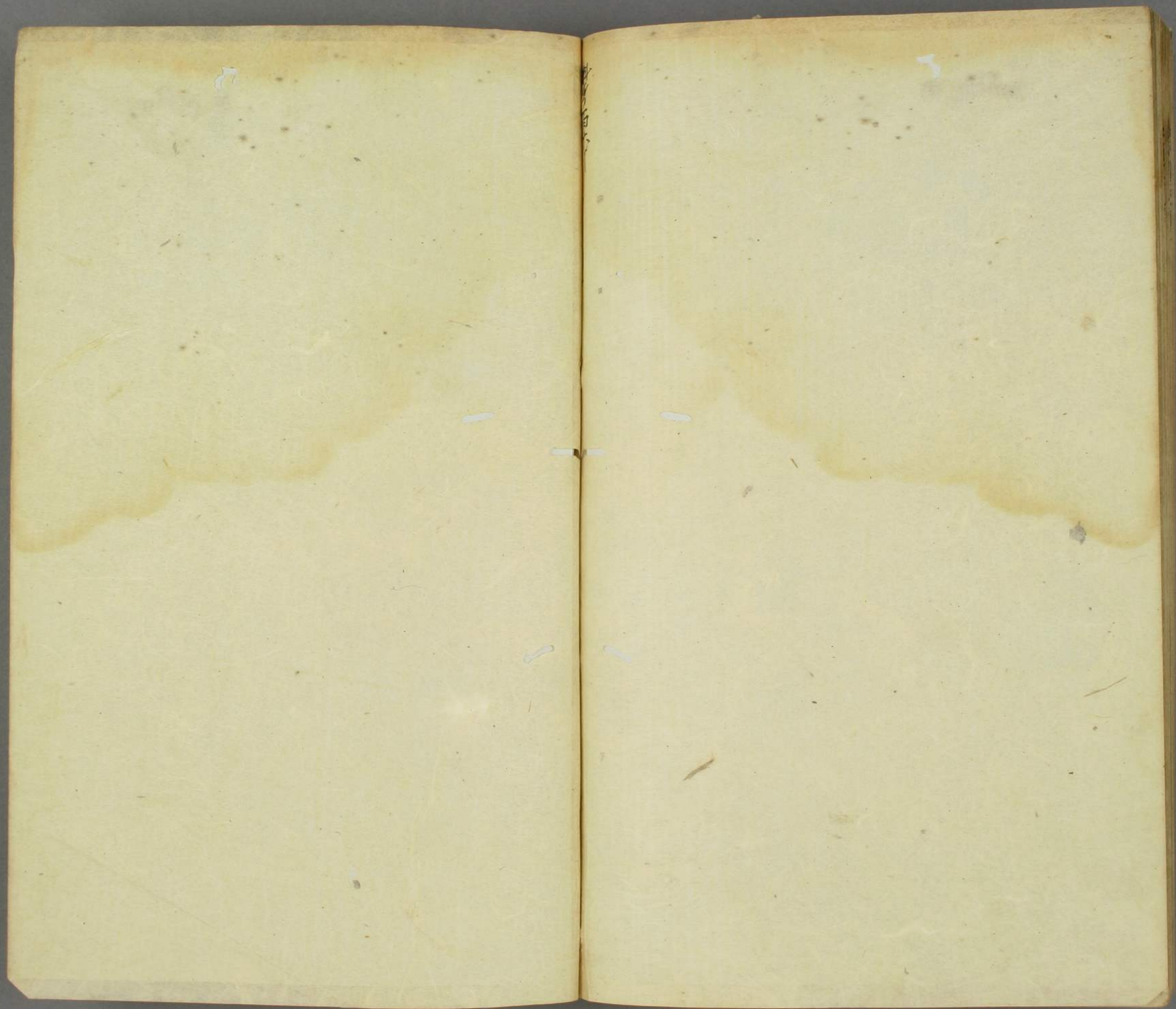


神ふ郡より久米郡なりて其く今まさうのふし  
う河川等より所は下はのまはえりてけりて  
多味郡の二ヶの下ありて今まのふしけりて  
人まはえりて今まの同よて人のこゝて月日あり  
新れりて今まのふしけりてわられたりて  
人知りのたふあれたるのふしけりて  
草花ふいりて今まのふしけりて  
鳥ぬりて今まのふしけりて  
うれあかはんやして今まのふしけりて  
すこりりり山岡のふしけりて今まのふしけりて

よりふりて今まのふしけりて  
うたせとて今まのふしけりて  
ふりて今まのふしけりて  
位ふりて今まのふしけりて  
百代のふしけりて今まのふしけりて

是れ不足言也トは言ふべし







天正十一年 美  
六月十二日書始至十四日書切了 幻庵抄書  
寫之間早之草束之了 上中下三卷九日切了 藏心



